

初期のアルツハイマー型認知症を患う夫と 困惑する妻の在宅生活をどう支えるか

スーパーバイザー

奥川幸子（対人援助職トレーナー）

事例提出者

Tさん（居宅介護支援事業所・社会福祉士）

提出理由

平成17年5月からのかわりのため、まだ数回の訪問面接しか行っていません。しかし、1回1回がしんどく、精神的にこたえるものでした。クライアントは70歳代のご夫婦、アルツハイマー型認知症と診断された夫が外出しなくなり、家の中で暴力をふるう、との妻からの訴えで相談援助は始まりました。ケアマネジャーとして、夫を「利用者本人」ととらえ、基本に則り夫との意思疎通を大事にしようとしたのですが、夫との会話をささざるように妻が発する夫への罵詈雑言に辟易しているのが現状です。

このしんどい状況をどうすれば乗り越えられるのか、よい方法を知りたいと思って提出しました。

事例の概要

・クライアント

K氏（78歳・男性）

・事例の概要

住環境の整った地域に建つ5階建てのマンションの2階（3DK）に夫婦が居住。子育ての時期は生

活環境のよい場所だと郊外の一軒家で暮らしていたが、子ども（息子二人）も独立し、夫婦二人の生活には広すぎるので、3年ほど前に現住居へ転居。

夫は平成16年5月に散歩中に転倒、その時期から不眠、毎晩の飲酒、うつ状態となる。MRIの検査でアルツハイマー型認知症との診断が出ており、薬が処方されている。

平成17年3月に夫の状態を不安に思った妻が介護保険の申請を行う。同月、要介護認定調査のために在宅介護支援センターの職員が訪問した。

・紹介経路

平成17年5月17日

A在宅介護支援センターB氏より電話にて、新規ケースとしてケアマネジャーを担当してくれないかとの依頼あり。B氏は認定調査で訪問しており、その際に得た情報などをいただく。

・クライアントのプロフィール

○診断名・既往歴等

平成16年5月 アルツハイマー型認知症（服薬中）

○現在の状態

要介護認定：要介護2

身体障害者手帳：なし

ADLならびに精神状態

- ・麻痺・拘縮：四肢麻痺・拘縮はないものの、下肢筋力低下は否めない。
- ・立ち上がり・歩行：布団からの起き上がり、立ち上がりは何かにつかまりながらであればできる。歩行はふらつきがあり、数十mに1回は立ち止まったり、腰かけて休むことが必要。杖はなし。
- ・排泄：トイレに自分で行けているが、妻によると便失禁の下着を入浴後もはこうとしたことがあ



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

る。それを注意すると怒鳴ったり、暴力行為に及ぶ。

- ・食事：配膳されれば自分で食べる。妻は配膳した後は一緒に食べることはせず、別室で食べている。
- ・入浴：自宅では一人で入浴。きちんと洗えているかは不明。
- ・清潔：歯磨き、整髪、洗顔、爪切り等は自分でやっているが完全ではないかもしれない。
- ・更衣：脱いだものを、汚れていてもまた着てしまう。洗濯に出さない等、声かけが必要な状態。
- ・服薬：妻がテーブルの上に置いておくが、飲んだ飲まないで言い争いになる。飲めていない？
- ・視力・聴力：若干低下傾向はあるが、日常生活上は支障ない？
- ・意思決定：意思表示ははっきりしているが、日常的に的確な意思決定能力があるかは不明。
- ・家族構成と家族関係：子ども（息子二人）はいずれも家庭をもち、車で30分～1時間程度のところに居住。日常的にはかかわりはなく、親子全員が顔をそろえるのは正月程度。

・生活歴

関東地方の農家の出身。戦争中は海軍に所属。少年飛行兵として訓練を受ける。戦後は商社に勤務。

大会社の管理職として勤務していた頃は仕事と接待、麻雀等でほとんど家にいなかった。

・経済状況

具体的な数字は聞いていないが、厚生年金と思われる。経済面で困っているような話はない。

・アセスメント面接実施内容と経過

平成17年5月19日16:00～17:00

初回訪問。A在宅介護支援センターのB氏と同行

訪問。妻の希望により、本人は自室にいるまま、まずは妻との面接となる。室内には妻の趣味である絵画や楽器、楽譜等が多数ある。ケアマネジャーとして自己紹介をするうちに妻から現状の訴えが始まり、途切れない。「私に向かってすごい声で吠えるのよ」「脱いだ下着に便がついてたから、お風呂入ってるあの人に『自分で洗いなさいよ！』って投げつけたら、浴槽のふたを投げてきて、あざになったのよ！」「菓子をテーブルに置いておくのに、飲まないのよ。聞くと飲んだとか嘘ついて！」など、口調もかなり激しい。

約1時間、妻のペースに圧倒されているうちに、予定どおりB氏は一足先に退室することになり、それを機に妻が本人を呼び、本人と妻とケアマネジャーでの面接となった。本人は男性としては小柄で物腰も丁寧で威圧感を感じられない。視線を合わそうとはせず、おどおどしている印象すら受ける。ケアマネジャーが自己紹介しながら丁寧に應對していると、横から妻が「そんなに優しくなんかしないでいいのよ、こんな人！ひとさまにはこうやってまともにするくせに！私にはすぐ吠えるのよ！」と。ケアマネジャーが「まあまあ、誰だってひとさまにはいい顔をしますよ、私だって」と答えると、妻は「そうでしょ？だからこそ、今あなたがいる間に私ははっきりこの人に言っておきたいの！二人きりになるとすぐ吠えるし、怖くて話にならないから。いい？お願いだから私の言うことをきいてちょうだい。言うとおりにしてちょうだい。こうやって、あなたのことを考えて介護の人に来ていただいているんだから。もう、そうでないと私はこの家にいられないから、出ていきますからね。この人は

私が出ていかないとってタカをくくっているのよ」となじるような口調。

本人は初めは聞き流すような態度だったのが、だんだん怒りの感情を押し殺すような表情になり、低い小さい声で「わかったよ」と。話の流れを受けてケアマネジャーから本人に「家の中だけでいるより、たまには外へ出ることも気分転換になるし、足腰の衰えを予防するためにもいかがですか」と話し、本人が「まあ、外出はしますがね」と言いかけたとたんに、妻が「嘘ばかり！ ここのところ出かけたりなんてしてないじゃないの！ ジーッと家の中ばかりにいるくせに！」と。ケアマネジャーがデイケアの説明をして、「今度ご一緒に見学に行きませんか？」と言うと、拍子抜けするくらいアッサリと「はい、いいですね」と本人。あっけにとられた様子の妻と、早速3日後にデイケア見学予定とする。

帰りがけに玄関先で妻に、やはりアルツハイマー症状が顕著であること、何より本人が一番混乱し不安であるだろうことを伝えるが、相変わらず妻は「そう？ わざとなんじゃないかしら、しらばっくれているだけなんじゃない？ 昔からそういうところがある人だから」と。

事務所に戻った後、喜んでいる声で妻から電話が入る。「びっくりよ！ あの人、いま出かけたのよ！ 久しぶりよ、自分で散歩に出かけるなんて」。リスクを心配しつつも、おそらくデイケア見学に向けての準備のつもりではないかと話し、ケアマネジャーがかかわっていくことが一歩前進になればよいと願っている旨を伝える。

5月22日10:20~11:30

バスにて本人とケアマネジャーがデイケア見学。デイケアではまったく躊躇することなく自然に集団体操に参加。今後、週1回利用することとなる。

5月25日

デイケア初回利用日。夕方デイケアへ電話をかけ



状況確認をすると、「問題なくご利用いただきました」とのこと。自宅へ電話するが、誰も出ない。

5月26日

妻から電話が入り、「昨晚は吠えまくって大変だった。怖くて眠れなかった」とのこと。翌日13時に訪問のアポイントをとる。

5月27日13:00~14:00

訪問。本人は自室にいるまま、まずは妻との面接となる。妻によると、「デイケア初回利用中に、不整脈があるから診察させてくださいとか、入浴しないので奥様からも言ってくださいとか、職員から電話がかかってきて負担になる。本人が帰ってきてから話を聞いてもらえばくれる。問いつめると吠える。昔からあの人は気が小さい男なのよ。新しいことを始めるのは嫌がる人で、感謝ということを知らない。『ありがとう』と私に1回だって言ったことのない人なのよ」と。続いて、「聞いてよ、だって雑巾をわざと食器乾燥機の中に入れるのよ。それを注意したら吠えるの。もう食器全部洗い直して、悔しくて眠れないわよ」と。アルツハイマー症状のせいで、本人に悪意はないのでは、とのケアマネジャーの説明にも、妻は「そうなのかしら……いや、違うわよ」と納得できない様子。

妻が本人を部屋から呼び出す。ケアマネジャーが本人にデイケアの様子を聞くと、自分のノートを取り出してメモしてあることを指さしながら説明してくれる。「次は25日かな（初回に行った日）」と、

行く気満々の様子。すかさず妻が激しい口調で「違うでしょ！ まったくもう！ 何度言ったらわかるの！ 次は6月1日でしょ！」。その後も妻の激しい口調での訴えが続き、なかなか口を挟めない。

最後に妻は「ごめんなさいねー、いろいろと。でも、来てくださって助かるわ。二人だけだと話もできないから」と言ってくれるが、かえって言い争いをさせてしまっているようで、後味は悪い。

6月1日11:15~12:00

デイケアにて利用中の本人の様子を確認。楽しそうというわけではないが、なんとか集団のなかでも落ち着いている様子。感想をたずねると、ケアマネジャーをハッキリ認識はできていないようだが、「体操とかしていると楽しいです」と言う。

※

その後、本人は週1回ペースでデイケアに通って

いる。ケアマネジャーは3回ほどモニタリング訪問をしているが、妻の激しい口調は変わらない。

・考察

訪問を終えた後は、毎回私が精神的にダメージを受けてしまっています。妻から夫へ対する口調の激しさに辟易し、アルツハイマー症への無理解に悲しくなります。長年蓄積した家族の問題は、ある時から援助者がかかわったからといって急に解決できるとも思えません。しかし、アルツハイマーという病気がきっかけで幸か不幸か露呈した夫婦間の問題を、なんとか解決できるように伴走する役割を担えればと考えます。援助は始まったばかりですが、関係機関の方々のお力を借りて、なんとかプロとしてのかかわり続けていけたらと願っているところです。ご指導よろしくお願い致します。

ケース検討会

「しんどい」のはなぜか

奥川 Tさんがこの事例を提出しようと思った一番の理由は何ですか？

Tさん いま担当しているケースのなかで、一番精神的にしんどいからです。

奥川 そのしんどさはどこからきていますか？

Tさん ご主人と奥さんに挟まれて、どっちを向いたらいいかわからない、というところでしょうか。

奥川 もう少し説明していただけますか？

Tさん 私は、まずご本人に拒否されてはいけないと思ったので、ご主人に受け入れていただけるように接しました。受け答えを丁寧にしたり、奥さんとの三者面接の時でも、極力ご主人に向かって語りかけるようにしていました。でも、そうすると横から奥さんが「こっちを向いて！」という感じで話しか

けてくるのです。奥さんとの距離のとり方がよくわからなくて……。

奥川 Tさんは、クライアントは誰だと思っていますか？

Tさん ご主人はもちろんですが、奥さんも援助を必要とする方ですので、やはりクライアントだと思います。

奥川 そう思っているから、ご主人に対する罵詈雑言も聞いているのですよね。

Tさん はい。

奥川 では、改めてお聞きしますが、どの部分がしんどく感じるのでしょうか？

Tさん ご本人が暴言を吐いたりするのは、奥さんがワーワー言うことも原因の一つになっているように思えます。ですから、奥さんがアルツハイマーについて理解し、適切に対応できるようになれば、ご

主人の暴言などもおさまるのではないかと思うのです。ただ、実際に奥さんに理解していただき、対応を変えていただくのは大変な仕事だなあ、と……。

奥川 それでしんどいのですね。

Tさん はい。

奥川 しんどい理由がでてきました。妻が病気のことを理解して態度を変えれば、夫の暴言などもおさまるのではないか。そのことを奥さんにわかってもらいたいと思っているのですよね。

Tさん はい。でも、どんなふうアプローチすればよいか分かりません。

奥川 アプローチのしかたを探るためには、なぜ奥さんがこんなにイライラしているのかを解明する必要がありますよね。

Tさん たしかに――。

奥川 では、まずは奥さんのイライラについて解明していきましょう。そのためには、ご夫婦に関する情報をそろえる作業が必要です。その上で、奥さんが今いるのはどのような地点なのか、これからTさんはどんなかかわり方をしていけばよいのかを考えていく。こういう流れではいかがですか？

Tさん はい、ぜひお願いします。

生活歴について

奥川 では、まずはこのご夫婦とご夫婦を取り巻く環境について深く理解するための情報をTさんから引き出してみてください。

発言 ご主人が仕事をしている時、定年後、発症後の夫婦関係の変化について教えてください。

奥川 いい質問です。

Tさん ご主人が現役だった頃は、奥さんの言葉を借りれば「母子家庭」だったそうです。ご主人は家庭を顧みず、仕事熱心でお酒や麻雀も強かった。大企業の管理職としてバリバリお金を稼ぎ、一方奥さんは子育てに力を入れて、2人の子どもをエリートとして育て上げました。

奥川 世間的には成功している家庭ですね。

Tさん はい。絵に描いたような高度経済成長下のエリート・サラリーマン家庭だと思います。ご主人は定年後も別の会社で働いて、70歳まで現役でした。その後、アルツハイマー発症までの8年あまりが第2の時期になります。この間は、奥さんは趣味がたくさんあるので毎日のように外に出かけ、ご主人は、これも典型的ですが、地域にうまくなじめず、家に閉じこもりがちで、趣味の真空管のラジオ作りなどをしていたようです。時にはお風呂を沸かして奥さんの帰りを待ったり、コーヒーを淹れてあげることもあったと聞いています。

奥川 夫婦がお互い別々に時間を過ごすことが多かったのですね。

Tさん そのようです。奥さんは洋服も綺麗で可愛い服をたくさんお持ちで、お友達もたくさんいます。とても外向的な方です。ところが発症後は、家のことをしていたご主人にできないことが多くなったので、奥さんがやらなければいけなくなってきました。奥さんとしては、相変わらず外に出かけて趣味を楽しみたいのに、そうできなくなってきた。それでイライラしているのかな……。

奥川 話しているうちにだんだん整理されてきましたね(笑)。

Tさん はい(苦笑)。

奥川 次の質問をどうぞ。

発言 発症前、奥さんが趣味活動で外出されていた間、ご主人は食事など身の回りのことは不自由なくこなしていってらっしゃったのですか？

Tさん そのようです。ご主人は自分で台所に立つ方で、自分の分くらいはまかなえていたようです。

奥川 奥さんが出かける前に夕食の準備などをどれくらいしていたか、聞いていますか？

Tさん いえ、具体的には聞いていません。

奥川 なぜ、その情報が必要かわかりますか？

Tさん ……発症前後の奥さんの仕事量の変化を見

るため、でしょうか？

奥川 そう。物理的な仕事量の変化を見るためには、事実関係を押さえておくことが重要ですね。

Tさん はい——。

夫婦の関係性について

発言 MRIを撮った経過と、診断を受けた時に奥さんがどういう気持ちでその結果を受けとめたのかわかれば教えてください。

Tさん MRIは散歩中に転んでケガをした時の診察の際に撮りました。診断結果は奥さんも同席して聞いていますが、どう受けとめたのかは確認できていません……。

奥川 妻がアルツハイマーについて正確な知識もっているのか、どのくらい腑に落ちているのか、今の夫への態度はどんな気持ちから発しているものなのかといったことを確認するのは、妻の現状をアセスメントする上で欠かせない情報ですね。

Tさん そのとおりだと思います……。

発言 MRIでハッキリする前から、気になる行動や異変の兆候はなかったのでしょうか？

Tさん あったようです。「そういえば、と思うようなことはあったのよ」とおっしゃっていました。

奥川 その反応からどんなことが読みとれますか。

Tさん う～ん……。

奥川 「そういえば」というのは、奥さんはご主人

に異変があっても、その場では気づかなかったということですから、奥さんがご主人の日常の言動について注意を払うような関係性ではなかったのかな、と類推できますよね。

Tさん なるほど——。

奥川 ただし、これはあくまでも援助者側の類推ですから、実際にどうだったのかは事実関係を確認する必要があります。

発言 食事は別々の部屋でとっているようですが、昔からそうなんですか？

Tさん いえ、別室でとるようになったのは発症してからです。奥さんの話では、「自分がせっせと作ってあげても、一言もありがとうと言わない。おいしい、とも言わずに黙って食べられると、一緒に食べていても楽しくないから別々に食べることにした」ということでした。

発言 ご主人は現役時代は毎晩お酒を飲んだり麻雀をしたりと、かなり社交的な方だったようですが、仕事を辞められてからの閉じこもりがちの生活とはギャップがあるように感じたのですが——。

Tさん 現役時代の情報は、訪問調査に行かれた在宅介護支援センターのBさんから書面でいただいた情報なので……。

奥川 今日はBさんもいらしているんですね。今のご質問についてはいかがでしょう。

Bさん 現役時代はたしかに毎晩のように飲みに出かけたり麻雀をしていたようですが、本来は大勢の人と付き合うのは得意ではないということでした。

奥川 ご主人像が少し違ってきましたね。

Tさん はい……。

奥川 今のようところが書面で情報をもらう時の落とし穴です。どうしても行間が抜け落ちてしまいがちなんです。どれだけ前情報があっても、本来は自分でもう一度取り直す必要があります。書面情報でわかったような気にならず、「もう一度同じことを伺って申し訳ありませんが、私自身がきちっと理



解をした上で支援をさせていただきたいので、教えていただけますか」と言って、自分が理解できるように聞かせていただくことが大切です。

Tさん はい、わかりました。

妻とケアマネの関係性について

発言 ADL情報のなかで入浴が「きちんと洗えているか不明」とあるのはどういうことでしょうか？

Tさん 奥さんが入浴中の様子を確認していないので、ハッキリしたことがわからないのです。

奥川 他にも、「清潔は完全ではないかもしれない」とか「薬も飲めていないかもしれない」といった不確かな情報がありますね。

Tさん はい……。

奥川 まだかかわり始めて間もないのでしかたがない面もありますが、ご主人が今どんな状態にあり、奥さんがなぜこんなにイライラするのかを解明するには、一つひとつの事実をキチッと押さえておく必要があるのはわかりますよね。

Tさん はい。

奥川 その時には、奥さんが浴室をのぞかないのはなぜなのか、のぞこうすると夫が怒るからなのか、妻のほうに関心がないからなのか。そういった点も確認することが重要です。

Tさん はい、わかりました。なんとか奥さんがワーッと言ってくる隙間をねらって必要な情報を聞きたいとは思っているのですが……。

奥川 その状況は全然変わっていないのですか？

Tさん ワーッとおっしゃるのは変わりませんが、最初の頃よりは私が話す比率が少しずつ増えています。徐々に「相談」になってきています。

奥川 どういう内容の相談ですか？

Tさん デイケアのことやアルツハイマーのことなど、専門家としての私の意見を聞いてこられます。「どう思う？」とか「こういうことはよくあることなの？」というように。

奥川 いい方向には向かっているんですね。

Tさん ただ、まだ私のペースではありません。私が「アルツハイマーとは」と話そうとすると、伝えたいことの10分の1くらい言いかけたところで、奥さんが10倍くらいワーッと話されます。こちらが10を伝えるためには100くらい聞かないといけない状況です。

奥川 奥さんは誰に対してもそうなのですか？

Tさん そういうわけではありません。たとえば、デイケアでご主人は午後になると帰宅願望が強くなるようで、デイケアのほうからなんとかしてくれないかと相談があったので、その状況を奥さんにお伝えしたことがあります。すると、奥さんは自分の友人に相談をして「それはデイケアの仕事でしょう」と言われたらしく、「私もそう思うの。自分の自由時間はきちんとほしいから、定刻までデイケアにいるようにさせてください」と言われました。

奥川 奥さんは友人に冷静に相談をして、その結果と自分の考えをケアマネに伝えてくる。そういう力をもっている方なんですね。ところが、Tさんにはワーッと激しい言葉で話し続ける。これはどういうことでしょうか？

Tさん う～ん……。

奥川 皆さん、どういうことだと思いますか？

発言 友人とは以前からの知り合いなので、少し格好をつけたいという気持ちが働くのではないのでしょうか。それに対してTさんには、専門職でもあるし、最初に自分の話を受けとめてくれたので、この人は自分の話を聞いてくれる人、と奥さんのなかでポジショニングされてしまったのではないのでしょうか。

Tさん なるほど――。

奥川 そのとおりでしょうね。ただ、ネガティブな感情を表出できるというのは、奥さんにとってはありがたい存在なんですよ。それもニーズですから。

Tさん そういえば、「こんな恥ずかしいこと、ひ



と様には言えないのよ」とおっしゃっていました。

奥川 Tさんだから言えるということですね。

Tさん そういうニュアンスでした。

奥川 聞き続けたかがありましたね。そういう自分のことをどう思いますか？

Tさん 奥さんにネガティブな感情表出をしてもよい相手と認められている、立派な援助職（笑）。

奥川 自己評価がずいぶん上がりましたね（笑）。

今後、どう対応していくか

奥川 まだまだ抜けている情報はたくさんありますが、これまでに見えてきた部分を分析・統合すると、この奥さんは今どんな状況にいるといえるでしょう。

Tさん この先どうになってしまうのかと不安と混乱のなかにいる。

奥川 そうですね。しかも、このご夫婦は現役時代はエリートサラリーマンの家庭を営み、その後は趣味を楽しんできた。つまり、勝ち得たものが大きかった人生ですね。でも、これからはどうですか？

Tさん 失っていくことの多い人生……。

奥川 そう。そのことに対して今の奥さんはどうしているのでしょうか？

Tさん 悲鳴を上げている……。

奥川 そうですよ。Tさんは援助職者として基本的な価値観を身につけているので、しんどい思いをしながらも、奥さんの悲鳴を途中でさえぎったりしないで聞いている。それだけでも奥さんはかなり救われているはず。もう少し腕が上がると、聞きながら手当をすることができるようになりますよ。

さて、ここまでのやりとりでクライアントやTさんがおかれている状況が見えてきました。これからどうしていけばいいと思いますか？

Tさん 少しずつ私が話せる割合は増えてきているので、奥さんの話に耳を傾けつつ、必要なことをちょとずつお話して、奥さんに満足感を味わっていただきたいと思います。

奥川 そうですね。アルツハイマーの話なども、自分で力んで解説しようとしなくても、「そのお話はこんど病院に行った時に先生にお聞きになると、もっとよくわかりますよ」といったように、短い言葉を的確に返していく方法をとると、奥さんの満足度は高まっていくでしょう。

Tさん はい。そういう方法のほうが、この奥さんにとっては効果的だと思います。何か今後の展望が見えてきた気がします。

奥川 では、Tさん、最後に感想をどうぞ。

Tさん このケースは、とにかく奥さんの言葉の勢いがすごくて、しんどい気持ちが先に立っていたのですが、今日みなさんに検討していただいたおかげで、奥さんが今どんな段階にいるのかが見えてきました。また、これまでの私のかかり方で多少は役に立っているということがわかり、しんどさが少し軽くなりました。徐々に私が発言する割合が高まっていますので、不足しているアセスメント情報をとりつつ、奥さんにお話しいただくなかで、少しずつでもよい方向にもっていけたらと思います。奥さん主体の援助ができそうな気がしてきたので、奥さんに会いたくなりました（笑）。今日は本当にありがとうございました。